

第 1 4 回会議で出された主な意見

【北九州市の目指す教育の姿について】

(子どもの未来をひらく教育改革会議報告書(案)に対する意見)

第 2 章 子どもの未来をひらく教育の理念

1. 目指す子ども像(北九州っ子)

5 ページの「子どもたちが自らの夢や希望をもって、学習、スポーツ、部活動、地域活動など～」という文章に、「文化・芸術」という文言を入れる必要があるのではないか。スポーツが入っていて文化・芸術が入っていないというのは違和感がある。

2. 家庭、学校、地域への期待と連携のあり方

【家庭への期待】

【家庭が役割を果たすための条件整備】で、「～家庭教育の重要性への気づきを促す～」とあるが、保護者に促すのか、家庭がきちんと教育に関わることが大事であるということを支えていく、例えば、企業や行政に対する気づきの促すなのかはっきりしない。家庭が本当に教育に向ける意義付けのような文章表現にしたほうがよいと思う。

(1)「家庭への期待」の枠囲みの部分は「～すべての教育の出発点。～」と「。」で切ると不完全な文章になる気がする。「～すべての教育の出発点であり、その根本は心身の健やかな成長を促す家族の愛情である。」と整理をしたほうがいいのではないか。

(1)「家庭への期待」の枠囲みの部分に、「愛情」、「心身の健やかな成長を促す」という言葉を入れるほうがよいと思う。「愛情」は、「子どもを思う心、慈しむ心、尽くす心」であり、その心、愛情こそが教育の基本、土台と考える。また、「心身の健やかな成長を促す」は、学校生活や社会生活に適應できない子どもや大人、子育てになってしまい、結局は子ども自身が不幸になるということがないようにするためにも、これらに文言を枠囲みにきちんと入れた文章にすべきであると提案する。

家庭への期待は、教育改革会議が考える家庭への期待であるならば、今の文章のままでもいいと思う。家庭の役割の中で、家庭における家族の愛情というのは、乳幼児期からはぐまれて大切であるというように書かれてあるので、「家族の愛情である」というように限定した書き方をすると、少し狭まれてしまい過ぎると思う。

期待や役割を考えることは非常に難しいと思う。例えば、学校の先生では、お子さんがいる方は家庭への期待を受け、学校への期待ということを楽しむ、地域の一員としての期待という3重の期待をかけられることになり、過剰期待になってしまうと思う。また、期待があるからにはそれぞれの役割を果たさなければいけないということになり、しかも方向性が限定付きになると少し重たくなると思う。

枠囲みの部分では、やはり家族の愛情というのが根本で、人間性としていけると思うので、愛情を強調したほうがよいと思う。重くなるかもしれないが、やはり根本は愛情だと思うので、「愛情」という文言を入れることに賛成である。

枠囲みの部分は、学校では、「子どもが人と人とのかかわりの中で学び、～」と書いてあるので、家庭では、「すべての教育の出発点。」と切るよりも、基本として、人とかかわる力も人から愛されないといけないので入れるべきと思う。しかし、重く感じられるということも分かるので、言葉を吟味して入れたほうがいいと思う。

枠囲みの部分では、「根本」という言葉は少しきついと思うので、「すべての教育の出発点、周囲に支えられ、学校、地域に参画し、子どもへの愛情をもって心と育ちを支える」などの表現にすればいいのではないかと思う。

家庭の役割は、改革会議では、やはり周りのサポートが必要であり、それは、学校、地域、行政、企業であるという論議であったと思うので、「家庭が学校、地域に積極的に参画し」ではなく、「参画でき」という表現がベターであると思う。7ページ下の4行全体の表現も、もう少し家庭をサポートする周りの責任、資質というのをどう表現するかという書き方のほうが、会議の論議からは筋が通るのではないかと思う。

枠囲みの中で、「学校、地域に参画し」ということで、意味が通じるのか。地域に参画というのは、地域活動で地域に参画ということなのかなど、言葉としてどうかと思っている。先ほど発言のあった「参画できる」という表現であれば分かる。

【学校への期待】

「理不尽な要求」については、前回報告されたような内容は事実としてあるのだろうと思う。しかし、このように表現すると、保護者は何を言っても理不尽と取られ、余計言わなくなってしまうのではないか。「開かれた学校」といいながら、保護者の要求を理不尽とくくることは、保護者の率直な意見として若干矛盾を感じる。ただ、どうしても変えてほしいとまでは言わない。

理不尽な要求があるという現実立ち、どういう条件整備をやるかというときに、少し文面がはっきりしないと思う。例えば、現場の職員ではもう対応できないと、以前、委員が言われていたが、そういうときには外部人材を学校に配置しておいて、その方を中心に対応していくとするなど、文言の整理の点でいえば少し不十分と感じる。

学校で今、どうすれば職員がやる気を起こすか、活性化するか、別な意味で自分なりに認識しているつもりである。学校現場のためには、子どもと職員の視点に立った学校長が増えてほしい。一方で、校長だけということではなく、学校長を中心として職員が連携した中で学校を活性化していくという表現のほうが、現実的な文章だと思う。

学校は、情報が入ってくることによって正常化に向けた活動ができる。苦情は課題を突きつけられているのだから、当然、真摯に対応しなければならないと思っている。

ただ、「一部の保護者から理不尽な要求」とあるが、理不尽な要求を出している保護者は、基本的にこれを理不尽とっていない。だから、受ける側としては、行政もいろいろ対応策は取っているが、対応していても、あまりにも行き先、最後の終点が見えないというところについて、それにより、学校が非常に飽和状態になるということ、この文言で置いていただきたい。

理不尽な保護者を教育するという必要ではないか。保護者の気持ちを変えるのは、やはり教育だと思う。家庭教育学級があるが、十分に機能していないので、条件整備の中でもっと機能できるような対策を考えることが必要だと思う。例えば、今は、希望者だけの参加であるが、「卒業するまでに何ポイントまで取らないといけない」など、少し義務的なものを入れるなどして保護者を育てるという方向を考えてはどうか。「理不尽な要求」という文言については、「そういうことがある」と分かっていたければいいと思う。その文言があることによって、市全体の保護者の方が学校にいるようなことを言いにくいと感じられるならば、この文言は削ってもらって構わない。学校への期待の中に「挑戦し」という文言があるが、分かりにくいと思うので、少し言葉を考えたほうがいいと思う。

13ページの教職員の欄に書かれた3点（教職員の満足度、実感を重視）を保つためには、「理不尽な要求」という文言は入れておくべきではないかと思う。

【地域への期待】

表や1枚紙で見比べたときに、地域への期待が学校への期待や家庭への期待と少し入り方が違うので、そろえたほうがいいと思う。少なくとも「地域への期待」は、学校が子どもたちの心身をはぐくむ場とすれば、それに対して地域はどんな場ということを示したほうがいいと思う。

【地域が役割を果たすための条件整備】では、課題や取組みが書かれているが、子ども、学校など、教育に対して地域や企業がどのくらい理解しているのか疑問がある。企業等から一方的にプログラムなどをもらうのではなく、相互に理解する仕組みが必要であり、企業の研修で家庭教育学級をしてもらうことなどを考えるべきと思う。

(3) 地域への期待の【地域の役割】の下から3行について、子どもの育ちや生活環境に及ぼす影響を、地域が理解や意識の醸成をしてどうするのか。この3行の文言を地域に入れると地域はどうしようもなくなるのではないか。この文言を生かすならば、どこにもっていくべきか、もしくは、ここは削除しても構わないという気がする。

【家庭、学校、地域の連携のあり方】

この報告書は、全体的に保護者にはきついと思う。地域との連携でも「積極的に参加する姿勢が求められる」などと書かれているが、なぜそうなのか、そうならざるを得ないのかということがあまり語られず、要求型のようになっている。

第3章 子どもの未来をひらく教育～6つの視点ごとの方向性～

【「確かな学力と体力」に関する視点】

17ページの「各学校における「体力アッププラン」の推進」で、球技と武道が入っているが、陸上は入っていない。できれば全部の部活動を網羅したほうがいいのではないか。基礎体力のところで、カバーをしているとは思いますが、疑問に思う人はいる。

学校現場の考える取組みに関しては、枝葉の部分まで異常に事細かに書かれてしまっている。実際に現場にこれを下ろしてしまうと思いが伝わらなくて、これをやらなければいけないと思ってしまうのではないかな。もう少し、幹や根っこで書かれる表現になるよう整理すべきと思う。

日本のスポーツの中で競技人口のナンバー 1 は陸上競技であるので、「体力アッププラン」のところには、陸上競技も入れたほうがいいと思う。

18 ページに「研修に参加できない保護者などへの家庭教育の啓発の工夫」とあるが、これが一番大事であると思うが、報告書に書かれている施策は、現在、ほとんど実施されていると思う。家庭教育の啓発を広く行うには、市政だよりにチラシと一緒にに入れて配布する、テレビを使うというような啓発などがあってもいいのではないかな。

19 ページの で「食育など健全な心身の育成」とあるが、北九州市は家庭科の教育などが、かなり不足していると思う。食事をつくる、家事をする、衣服をつくるなど、家庭で生きていく上において必要な授業が軽視されている傾向が強い。人間が生きていくためのすべを培うためには、保健や家庭科などの教育は非常に重要であると思う。

【「学校の力をさらに高める」に関する視点】

職員のメンタルヘルスに対しては、身近にスクールカウンセラーもいる。中学校には毎週、小学校には半日で月 1 回行っている。また、上司には相談しやすい雰囲気もつくってほしい。

学校により異なるが、職員は、中休み・昼休みに職員室に降りて来られない現状にある。裏を返せば、人と人とのコミュニケーションが成り立たない実態になっているということであり、簡単に言えば、いわゆる多忙ということである。起きてからどう対応するかという前に、メンタル面で職員が落ち込まないような学校づくりが必要と思う。そういう論議が基本的にこの場でなされて、認識を持っていただくことが大切と思う。

「学校の力をさらに高める」の課題で、先生たちが子どもと向き合う時間は、やはりどうかしないといけない気がする。「向き合う時間の一層の確保」と、「一層の」ぐらいは入れてもらいたい。教育委員会はもう少し力を入れたほうがいいのではないかな。

【「学校や地域の教育活動を市民の力で支える」に関する視点】

P T A の育成・研修をやる、それが教育日本一をつくる中で一番手っ取り早いのではないかな。北九州全体の P T A の役員を集め、研修をしていく、そのようなプログラムを持つが、行政がやっていけば意識も変わると思うし、P T A の中で保護者に対して指導をしていけるのではないかな。教育日本一を目指す中で、日本一の P T A の組織を持つ地域にしようとかいうものがあれば、方法論として明確になってくるような気がする。

28 ページの「感性を刺激する文化・芸術の体験を支援する取組み」という文言については、感性を「刺激する」という言葉が少し適切ではない気がする。やはり感性という心の問題なので、「はぐくむ」や「豊かにする」と変えたほうがいいのではないかな。

【「心の育ちの推進（青少年の健全育成を含む）」に関する視点】

30 ページの【学校教育を充実・支援するための施策のあり方】の中で、「多様な経験に基づく教職員の人間性を重視し～」という文言があるが、この多様な経験に基づくというのはどういうことを言っているのか、意味がよくわからない。

30 ページの「多様な経験に基づく教職員の人間性を重視し～」という部分については、多様な経験に基づいた若い教職員は少ないと思っているので、削除すべきだと思う。やはり 22、23 歳で多様な経験というのは教員に限らず少ないと思う。

30 ページの【学校教育を充実・支援するための施策のあり方】の中に、「教職員一人ひとりの人間性の資質向上をさらに図る」という文言を入れてほしい。

11 年間、PTA の会長をしたが、年に 1、2 回、校長から呼び出しがくる。理不尽な父兄（親）と話をするのだが、ある意味ではややこしい話は、保護者同士のほうが話をつけやすいし、言いたいことが言える。バランス感覚のよい人が役職にいれば、学校もやりやすいと思う。そういう意味では、PTA を育てるというのは大事なことだと思う。

【その他の視点】

6 つの視点の並びについて、資料 1 「報告書」と資料 2 「報告書 概要」とは合わせるべきではないか。いろいろなところに資料として出ていくのであれば、きちんとそろえておくべきと思う。

6 つの視点は、全部（2）で「目指すべき方向性」となっている。この「べき」はとても強い表現ではないかということで意見を出していたが、ここだけ「目指すべき方向性」と残っており、文言は整理する必要があると思う。